

— 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

いのちを守るためにはなによりも平和が必要

いのちを守るためには、なによりも世の中が平和でなければなりません。平和を実現するためには、戦争をしないのはもちろんのことですが、「ゆるし」の気持ちを持つことがとても重要になります。だれでも失敗をしたり、いろいろとまちがった行動をしてしまうことがあります。それで被害を受けた人が仕返しをすると、世の中は平和にはなりません。仕返しが仕返しを呼んで、争いがどんどん大きくなっていくからです。

江戸時代には「あだ討ち」という制度がありました。自分の親や兄弟、家族を殺された人が届け出をして、殺した相手を探し出し、仕返しをするというものです。親しい人を殺された人たちの側から見れば、やりきれない気持ちを収めるための方法なのでしょうが、相手のほうから見れば「殺された」ということになり、新たなあだ討ちの理由ができてしまいます。どこかでだれかが「ゆるす」と決めないと、永久にあだ討ちがつづいてしまいます。

わたしがきみたちに持つてほしいのは、くやしい、つらい、にくいと思つても、仕返しをしないでゆるすという大きなことです。みんながそれを持つようになると、世の中全体で本当にいのちを大切にすることができるようになります。いじめの問題を考へるときでも、この「ゆるし」のころはとても大切です。わたしは、いまから十年以上前から、いじめのあつた多くの小学校を訪れ、四年生から六年生に「いのちの授業」という名の授業を行っています。そこでは、たがいにゆるし合うことにより、いじめがなくなるところが多いのです。

仕返しをしない「ゆるし」があるところにだけ、平和は訪れます。「ゆるし」の気持ちを持たないで、ただ口だけで「平和、平和」と唱えていても、平和は実現しません。いくら平和を守る憲法があつても、人々が「ゆるし」の精神を持っていないと、平和な世の中は訪れないのです。

「ゆるし」を実行するには、理性の力が必要です。人は感情にだけ流されると、しだいに動物のような弱肉強食の生き方になっていきます。感情はとても大切なものですが、人はそれだけで生きてはいけません。ときには理性の力を借りて、感情にストップをかけることも必要です。「くやしい」「がまんできない」と、暴力をふるいたくなくなったときこそ、理性の力で「ゆるし」を選んでほしいのです。

日本国憲法は「いのちの泉」のようなもの

わたしは、日本国憲法はいのちの泉のようなものだといいました。山の中の泉から、いのちが水のようにどんどん湧いてくるというイメージです。海に注ぐということは、水にたとえたいのちが死を迎ええるということです。湧き水が海に注ぐように、すべての人は泉からいのちを授かり、川の流れのような人生をたどつて、最後には海に注いで死んでいきます。

そして、海の水は潮の満ち引きによって河口から上流に上がつたり、下つたりしています。つまり、河口で生と死が混じり合つているというイメージです。わたしは生と死についてそんなふうに感じているので、話をするときに「生と死の境はないんだよ、行つたり来たりしているんだよ」といつています。

鴨 長明という人が書いた『方丈記』は、『徒然草』『枕草子』と並んで「日本三大随筆」と呼ばれるエッセイの名作です。そのはじめの文章の「行く河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず」という部分は、人生やいのちが絶えず移り変わつていてることを表しています。こういう文章は、いのちというものを考へるときに参考になります。

しかし、いまの便利な生活のなかでは、なかなかいのちの実感が湧きにくいというのも実情です。核家族化（注・親と子の未婚の子どもからなる家族が多くなること）が進んだために、身近な人の死にふれる機会が少なくなつていふこともあります。そういう環境のなかで、いのちを大切にしながら成長させていくことを学ぶには、「本当のいのち」を持つていふ人とふれ合うことが大切です。

「本当のいのち」を持つている人とは、限りあるいのちの大切さをよく知っていて、そのいのちをいっしょうけんめいに活かそうとしている人のことです。むかしはそういう人のことを、「聖人」と呼びました。聖人の近くにいると、いろいろな気づきを得ることができます。よい影響を受けて、自分のいけないところを直すきっかけになります。集まってくる人たちの交流を通じて、自分を高めることができます。

ダイヤモンドもみがかないと光りません。いくら自分のいのちのなかにすばらしい可能性を持っていても、みがかないとそれは活かされません。サッカー選手としての才能がねむっている人がいても、すぐれた監督といわれる指導者が必要なのです。よい指導者にめぐり会わないと、ただのサッカー好きで人生を終えてしまうかもしれません。いのちは、ただだいにすればいいというものではありません。みがいて光らせなければならぬのです。それが成長ということ。その成長のきっかけとなるのが、すぐれた人との出会いです。

わたしの好きなことばに「エンカウンター」という英語があります。これは、日本語に訳すと「邂逅」ということばがいちばん近いかもしれません。これは、出会いという意味です。

人は出会いによって変わっていきます。すぐれた人との出会いでいのちをみがかれることがありますし、出会う相手によっては随落することもあるでしょう。いのちを成長させるためには、自分をみがいてくれる人とたくさん出会うことが大切です。そういう人と出会うことによって、自分の可能性も高くなります。

そのときだいいじなのは、だれがすぐれた人であるかという見きわめです。そのためには人のすばらしさを評価することが必要になります。その評価とは、いのちの評価のことです。大きな会社の社長さんであるとか、お金をたくさん持っているとかではなくて、いのちに対する態度と、そのみがき方が評価の対象になります。

いくらものを持つていても、わたしたちは裸で生まれ、裸で死んでいきます。裸で死ぬときには、お金やものは持つていません。位も持つていません。では生まれてから死ぬときまでのことはすべてムダなのでしょうか。そんなことはありま

せん。その人が存在したことが、新しいいのちのモデルになることがあるのです。死ぬときまでに自分がどれだけ新しい人のモデルになれるか。それが望ましいいのちの本当のすがたです。

わたしたちは、たくさんの方の人のモデルになるために、自分をみがいていかなければなりません。限りあるいのちのなかで、最大限に自分をみがいていくこと。それが人生の目標です。そのためには、なにかを「持つ」のではなくて、なにかに「なる」ということが問われます。これはエーリッヒ・フロムという心理学者がいつていることです。

「持つ人生」と「なる人生」は、はっきりと区別しなければいけません。「持つ人生」は欲望とつながっているのです。いくら手に入れても満足するということがありません。だからもつともうけようとして、危ない株に投資したりしてたいへんなことになるわけです。それに対して、どんな人になりたいか、どうありたいかということは、目標をつくってそこに向かってほしいだけです。

しかも「持つ人生」は持つほどどんどん持つているものが重荷になります。が、「なる人生」は目標を次々と達成していくにつれて、ところが軽やかになっていきます。人間はなにも持たずに生まれてきて、なにも持たずに死んでいくのですから、「持つ人生」と「なる人生」のどちらが正しいかは、考えるまでもないことです。

(二〇一四年 日野原 重明『十代のきみたちへ—ぜひ読んでほしい憲法の本』富山房インターナショナル)

【注】* 墮落：規則正しい生活を乱し、品性がいやしくなること。

問 一 本文には次の一文が抜けています。どこに入れたらよいですか。この文の入る直後の五字を抜き出さない。

その泉の水は溪流になり、やがて川になって、最後には海に注ぎます。

問 二 傍線部1「平和を実現するためには、戦争をしないのはもちろんのことですが、『ゆるし』の気持ちを持つことがとても重要になります」とありますが、筆者がこのように考えるのはなぜですか。その理由として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 相手と張り合うことがあった後でも、「ゆるし」の気持ちを持つことで、その相手や相手の周囲の人々を敵とみなす必要がなくなるから。

イ 争いごとがあっても、「ゆるし」の気持ちを持っていれば、相手を自分と同じ目にあわせようという気持ちがおさえられるから。

ウ ゆるすことのできない相手に対しても、「ゆるし」の気持ちを持っていれば、今後はその相手の存在をまったく意識しなくてすむから。

エ どれほど傷つけられても、「ゆるし」の気持ちを持つことで、相手から受けた痛みを受け入れ、だれかを傷つけたいと思わなくなるから。

問 三 傍線部2「すぐれた人との出会いでいのちをみがかれることがあります」について、次の問いに答えなさい。

① 「すぐれた人」とはどのような人のことですか。具体的に説明している部分を文中から四十六字で抜き出し、初めと終わりの五字を答えなさい。

② 「すぐれた人との出会いでいのちをみがかれる」とは、どのようなことですか。その説明として適当でないものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「すぐれた人」と出会い、それをきっかけとして、さまざまなことを発見することができるということ。

イ 「すぐれた人」と出会い、その人とともに過ごすことで、自分の欠点を直すことができるということ。

ウ 「すぐれた人」と出会い、その人の周囲の人々ともかかわることで、成長できるということ。

エ 「すぐれた人」と出会い、才能をのばしてもらうことで、世界的に活躍かつやくできるようになるということ。

問 四 傍線部3「そんなことはありません」について、次の問いに答えなさい。

① 「そんなこと」が指す内容を、文中の言葉を用いて答えなさい。

② なぜ筆者は①の内容を否定しているのですか。その理由として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア その人のいのちは、死後にはじめて後の世代から評価されるから。

イ その人が生きていたという事実は、かけがえのないできごとだから。

ウ その人の人生がどんなものであれ、本人が納得していることが重要だから。

エ その人の生き方が、他の人の生き方の手本となることがあるから。

問 五 傍線部4『持つ人生』と『なる人生』について説明したもののうち、最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「持つ人生」は、持っているものの量によって、周囲からの評価を受けることになるものであり、「なる人生」は、たった一つの目標を達成しただけで満足することができるといえるものである。

イ 「持つ人生」は、持つものが増えれば増えるほど、心理的な負担も多くなっていくものであり、「なる人生」は、自分を成長させてくれる人物と、より多く出会うことだけが重要なものである。

ウ 「持つ人生」は、ほしいものを入手しても、またすぐに次のほしいものが出てきてしまうものであり、「なる人生」は、自分が志していることを見ずえて行動していくというものである。

エ 「持つ人生」は、ほしいと思うものに限りがなく、いくらお金があっても足りないものであり、「なる人生」は、出世すればするほど、お金をたくさん得られるようになるものである。

問 六 本文の内容と合っているものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 江戸時代にあった「あだ討ち」制度では、殺された本人の家族以外が、殺した相手を探し出して仕返しをすることを禁止していた。

イ 「くやしい」「がまんできない」という気持ちになるのは仕方のないことであるが、そのような感情に支配されてはいけなさと筆者は述べている。

ウ いのちを海にたとえて表現するという筆者の方法は、鳴長明の『方丈記』にも使われていて、人生を語る場合によく使われる方法である。

エ エーリッヒ・フロムは、「人は裸で生まれ、裸で死んでいくので、自分の財産は生きていくうちにすべて消費するべきだ」と言った。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

昭和のはじめ、瀬戸内海のある島の岬にある分教場に、女学校を卒業したばかりの大石先生(おなご先生)が赴任し、小学校一年生を担当することになった。ある日、大石先生は足にけがをしまして、分教場への通勤ができなくなってしまった。

大石先生のけががアキレス腱がぎれたということも、二、三か月はよくあるけまいということも、それらはみんな、こしにすずをつけてあるきまわっているチリリン屋がきいてきたものだった。

「そんなら、もうすぐに、先生くるかしらん。早うくるとええけんどな。」

早苗が目をかがやかすと、小ツルはまだそれをよこどりして、

「こられるもんか。まだ足が立たんのに。」

そして小ツルは、すこし調子にのって、

「おなご先生ん家へ、いつてみるか、みんなで。」

いつておいて、ぐるつと、ひとりひとりの顔を見まわした。竹一も、タンコの森岡正も、仁太もいつのまにかなかま入りしていた。しかし、だれひとり、すぐには小ツルの思いつきにさんせいするものはなかった。ただだまって一本松の方を見ているのは、そこまでの距離が、じぶんたちの計算ではけんとうがつかなかったからだ。かた道八キ口、おとなのことで二里という道のりは、一年生の足の経験でははかりしれなかった。とほうもない遠さであり、海の上からはいっしゅんで見たす近さでもある。ただ、氏神さまより遠いということはずこしわかった。かれらはまだ、だれひとり一本松まであるいていったものがないのだ。そのとちゆうにある本村の氏神さまへは、毎年祭りに、あるいたり、船にのったりして

くのだが、そこから先がどのぐらいなのか、だれも知らない。たつたひとり仁太が、ついこないだ一本松より先の町へいったことがある。しかしそれは、氏神さまの下からバスにのって、一本松のそばを通ったというだけのことだった。それでもみんなは、仁太をとりまいた。

「仁太、氏神さまから、一本松まで、何時間ぐらいかかった？」

すると仁太は、とくいになって、あおばなをすすりもせずに、

「氏神さまからなら、すぐじゃった。バスがな、ブーってらっばならしよって、一本松のどこつつ走ったもん。まんじゅう一つ食うてしまわんうちじゃったど。」

「うそつけえ、まんじゅう一つなら、一分間でくえらあ。」

竹一がそういうと、川本松江が、西口ミサ子に、「なあ。」と、同意をもとめながら、

「なんぼバスが早うても、一分間のはずがないわ、なあ。」

みんなの反対にあうと、仁太はむきになり、

「そやってぼく、氏神さまのどこで食いかけたまんじゅうが、バスをおりてもまだ、ちゃんと手にもとつたもん。」

「ほんまか？」

「ほんまじゃ。」

「指きりじゃ、こい。」

「よし、指きりするがよい。」

それで、みんなは安心をした。仁太が生まれてはじめてのつたバスのめずらしさに、まんじゅうをたべるのもわすれて、運転手の手もとを見ていたなど、だれもかんがえなかった。ただ、ともかくも仁太だけがバスにのつたことと、一本松のまだつぎの町でおきるまで、まんじゅう一つをたべるまがなかったことと、この二つからわりだして、氏神さまから一本松ま

での遠さを、たいしたことではないと思つた。たとえ自転車にのつてとはいえ、おなご先生はまいにち、あんなに朝早く一本松からかよつていたではないか。と、そんなことも遠さとしてより、近きとして、みんなの頭にかんだらしい。²そんなきもちのうごいてるときに、対岸の海ぞい道にバスが走っているのが見えたからたまらない。小さく小さく見えるバスは、まったく、あつというほどのまに走つて林の中へすがたをかけた。

「ああ、いきた！」

マスノがとんきようにさげんだ。なんということなく男の子にさえ力をもっているマスノの一声である。

「いこうや。」

「うん、いこう。」

正と竹一がさんせいした。

「いこう、いこう。走つていって、走つてもどろ。」

「そうじゃ、そうじゃ。」

小ツルと松江がとびとびしていきみたつた。だまつているのは早苗と、片桐コトエだけである。早苗はもちまへの無口からであつたが、³コトエのほうは複雑な顔をしていた。家のことを思いだしていたのである。

「コトやん、いかなの？」

小ツルがとがめだてるようにいうと、コトやんはますます不安な表情になり、

「おぼんに、問うてから。」

その小さな声には自信がなかつた。一年生のコトエをかしらに五人きようだいのかの女は、せなかにいつも子どもいなきことがなかつた。かぞえ年五つぐらいからかの女は子もり役をひきうけさせられていたのだ。家へかえつて相談すれば、とてもゆるされるみこみはなかつた。そしてまた、それは早苗や松江や小ツルもおなじであつた。みんな、しゅんとして顔

を見あつた。かぞえ年十さいになるまではあそんでもよいというのが、⁴むかしからの子どものおきてのようになっていたが、あそぶといつても、それはほんとうに自由にあそぶのではなく、いつも弟や妹をつれたり、赤んぼうをおんぶしてのうえでのごとだつた。ほんとに、すきかつてにあそんでよいのはひとりっ子のマスノとミサ子だけだ。

コトエのことはみんなにそれを思いださせたが、しかし、思いどまることはできない空気だつた。

A

小ツルが、のりかかつた船だともいうように、みんなをけしかけた。

B

竹一が知恵をめぐらしてそう決断した。こうなるともう、だれひとり反対するものはなく、秘密で出かけることがかえつてみんなをうきうきさせた。

「そうつとぬけだしてな、^{*}波止の上ぐらいからいっしょになろう。」

正がそういうと、^{*}総帥格のマスノはいっそうこまかく頭をつかい、

C

「それがえい。みんな、畑の道通つてぬけていこう。」

めいめい、きゆうにいそがしくなつた。

D

念をおしたのはコトエである。みんなが走つてかえつていくあとから、⁵コトエはかんがえかんがえあるいた。どうかんがえても、だまつてぬけだす工夫はないように思えた。じぶんだけはやめようか。しかしそれはできない。そんなことをしたら、あしたからだれもあそんでくれないかもしれぬと思つた。のけものになるのはいやだ。だまつてぬけだせたとしても、

あとでおぼんやおかあさんにしかられるのもいやだ。
赤んぼなんぞ、なければよかった。

そう思うと、いつもはかわいい赤んぼうのタケシの顔にくらしくなり、一日ぐらい、ほつたらかしくなった。かの女の足はきゆうにあともどりをし、畑の方へあるいていった。やぶが見えだすと走った。だれかに見つかりそうで、どきどきした。

(二〇〇四年 壺井 栄『二十四の瞳』新潮文庫)

〔注〕*分教場：分校。地理的な事情などから、本校から分離して作られた学校。

*赴任：新しく勤務する土地へ行くこと。

*チリリン屋：店のない岬の集落に雑貨などを売りに来る人。

*一本松：大石先生が住んでいる地名。

*氏神さま：同じ地域の人々が共同でまつる神さま。

*とんきよう：突然、その場にそぐわない調子はずれの言動をすること。

*かぞえ年：生まれた年を一歳とし、あとは新年を迎えることに一歳ずつ加える年齢。現在使われている満年齢より一歳多く数えることになる場合が多い。

*波止：海岸から海中に突き出させた、石でできた構築物。波を防いだり、荷物の積み降ろしに用いたりする。

*総帥：総大将。転じて、大きな組織を率いる人。

- 問 一 傍線部1「だれひとり、すぐには小ツルの思いつきにさんせいするものはなかった」とありますが、それはどうしてですか。その説明として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。
- ア チリリン屋から聞いた話だけで実際の太石先生のけがの具合もわからないため、苦勞して一本松まで歩いて行こうという気持ちがあわいてこなかったから。
- イ 一本松は氏神さまよりは遠いところだろうとは思っていたが、実際にどれぐらいの時間がかかるのかは想像できなかったため、返事ができなかったから。
- ウ 一本松まではだれも行ったことがなく、そこまでの距離を歩いた者もいなかったため、自分たちの足では大石先生に会いに行くことはできないと思ったから。
- エ 大好きな大石先生に会いたいとは思っているけれども、必ずしも大石先生に会えるとは限らないため、苦勞して一本松まで歩きたいとは思わなかったから。

問 二 傍線部2「そんなきもちのうごいているとき」とありますが、この場面でのみんなの気持ちを説明したものと最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 一本松に行くかどうか結論を出せずに困っていたが、仁太の話のおかげで決心がついたので、仁太に感謝している。
- イ はじめは仁太の話を信じられなかったが、自信をもって指きりをする仁太の姿を見て、彼を頼もしく思っている。
- ウ 仁太のバスに乗ったときの話から、実際に一本松までどれぐらいの時間がかかるのかがわかり、ほっとしている。
- エ 仁太の話と大石先生が毎日学校まで通ってきたことから、自分たちの足で行けないところでもないと期待している。

問 三 傍線部3「コトエのほうは複雑な顔をしていた」とありますが、なぜ「コトエ」は「複雑な顔」をしていたのですか。その説明として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア みんなと一緒に大石先生のところへ行きたい気持ちはあるものの、小学一年生の足ではとても一本松まで行けるわけがないと家族に反対されるに決まっているから。

イ 大石先生のけがの具合は気になるものの、しかられるのを覚悟して小さな弟や妹の子もりをする手伝いを投げ出してまで会いに行きたいとは感じていなかったから。

ウ 大石先生に会いたい気持ちはあるものの、弟や妹のめんどうをみなければならない自分は、みんなと一緒に行くことを家族に許してもらえないはずはないから。

エ 大石先生に会いに行けるのはうれしいものの、そうなるまで弟や妹の世話を家族に任せることになり、家族に迷惑をかけてしまうことを申し訳なく思ったから。

問 四 傍線部4「むかしからの子どものおきてのようになっていた」とありますが、「おきてのようになっていた」のはどのようなことですか。「〜という」と「〜に続く形で、わかりやすく説明しなさい。

問 五 A D に入る文として最も適当なものを、次のア～エの中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア そうじゃ、みんなうちの人じゃうたら、いかしてくれんかもしれん。だまっていこうや。

イ ほんまに、走って行って、走ってもどらんかな。

ウ 波止の上は、よろず屋のばあやんに見つかるとうるさいから、やぎのとくぐらいにしようや。

エ 飯たべたら、そうとぬげだしてこうや。

問 六 傍線部5「コトエはかんがえかんがえあるいた」とありますが、この時のコトエについて説明したものと最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア みんなと同じようにだまって出かけたなら家族に怒られるし、行かなければ仲間外れになる可能性があり、どちらにしてもいやな思いをしてしまうと考え、弟や妹がいなければこんな思いをしなくてもよいはずなのにとやんでい

イ 何も言わずに出かけても家族にしかられるし、みんなとの約束を守らなければいじめられてしまうだろうし、どちらを選んでも自分がいやな思いをするのであれば、よりいやな思いをしなくてすむのはどちらなのかをなやんでい

ウ 大石先生に会いに行くか行かないかで、こんなになやんでいるのは、赤んぼうがいるせいだと弟や妹のことをにくらしく思ってしまう、そんなふうに考えている自分のことを、だれかが見ているのではないかと心配している。

エ みんなが言うように、走って行って走ってもどつてこられたら弟や妹のめんどうをみる時間に合うかもしれないが、失敗したり家族にばれてしまったりしたときにはこっぴどく怒られてしまうかもしれないと心配している。

問七 この文章について、次の問いに答えなさい。

- ① この場面に登場する子どもの人数を、漢数字で答えなさい。
- ② この文章の特徴について説明したものと最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。
 - ア 一人の視点に固定せず、次々と視点を入れかえて描くことによって、幼少期特有の活発に動き回る子どもたちの様子を表現している。
 - イ 瀬戸内を舞台とし、その土地の方言を多く用いることで、子どもたちの幼さを感じさせる考えや心の動きを際立たせている。
 - ウ 会話文や心の動きを表現する文を多く用いることによって、子どもたちの考えや気持ちの変化をていねいに表現している。
 - エ 多くの人物を登場させることで、戦前のまずいながらもみんなで助け合いながら生活していた、古き良き日本の姿を描いている。

三

次の各問いに答えなさい。

問一 次の文には慣用句が用いられています。下の意味を参考にして、にあてはまる言葉として最も適当なものを、ア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

に帰す 「努力がむだになる。」

ア ひとほだ イ すいほう ウ いちもく エ きやつこう

問二 次の俳句は、どの季節の風物を詠んだものですか。季節を漢字で答えなさい。
おほほたる 大蛸 ゆらりゆらりと 通りけり 小林一茶

問三 次の文の傍線部は言葉の使い方がまちがっています。正しい形に直しなさい。
プロ野球の試合で、外野手の好プレーに観衆がにぎわう。

問四 次の熟語と組み立てが同じ熟語を、ア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。
「特権」 ア 運送 イ 発光 ウ 深海 エ 頭痛

五

次の傍線部のカタカナを漢字に改めなさい。

- 1 市長の発言をコウゼンと批判する。
- 2 成績がカクダンに上がった。
- 3 売上テンピョウを整理する。
- 4 トラバガニの漁がカイキンになる。
- 5 彼女は大きなまちがいをオカした。

六

次の傍線部の漢字の読みをひらがなで記しなさい。

- 1 兄は人徳があるので友人が多い。
- 2 新聞を読んで昨今の情勢を知る。
- 3 旅行に行くためお金を工面する。
- 4 汽車がゆつくりと陸橋をわたる。
- 5 兄の発言を逆手にとって反論する。

問題はこのページでおしまいです。

